

組合士 アラカルト

協業組合アクアテック栗原

専務理事

佐藤 正明さん
さとう ただあき

地域の若者が活き活き働ける組合を目指して

「水」を基本に据えて、事業を多角的に展開する協業組合

佐藤正明さんは、協業組合アクアテック栗原の専務理事を務める組合士である。アクアテック栗原は、昭和54年2月に宮城県栗原市内（当時は栗原郡）の6業者が集まって設立された。当初は浄化槽の維持管理をメイン業務としていたが、現在ではこれに加えて下水道処理施設・管路施設管理、汚水処理施設管理、ビル管理などに事業を拡大、さらに「水」を基本に可能性のある事業分野を常に模索している。

母体は、地元の清掃業の業者が昭和41年に設立した栗原清掃興業事業協同組合である。その中で浄化槽の維持管理部門を独立させて組合に提供して共同化し、雇用も組合で行う一部協業の組合がアクアテック栗原である。

協業組合は、4社以上の中小企業者が参加してその事業を統合して設立される。統合には組合員事業の一部を統合する場合（一部協業）と全部を統合する場合（全部協業）とがあるが、いずれの場合も、参加各社は企業として存続するが、統合した事業については企業としてはで

きなくなる。規模を適正化し、共同の利益を増進することが協業組合の目的だからである。

浄化槽の維持管理を始めた事業は事業者としての独自性と強みを確保するには、高度化した専門的な装置・機材と、そのための莫大な設備投資が必要となる。アクアテック栗原が協業組合を選択したのも、まさに規模を適正化してメリットを追究することで事業の強化・多角化を実現しようとしたからである。

現在では県内でも屈指の設備を誇り、ライフラインの1つである水に関しては地域における公共的な役割も担う存在となっており、昨年6月に発生した岩手・宮城内陸地震では給水活動や下水道管の調査等に即時に対応、現在も一部の設備に関しては震災後の補修や維持管理に携わっているという。

より高度な組合運営実現を目指して資格を取得

佐藤さんはアクアテックの母体組合の一部門であった「栗原浄化槽管理センター」に浄化槽点検員の一般職員として昭和53年4月に入職、今や30年のベテラン職員である。組合士として認定されたの

は平成6年で、資格取得から14年のベテラン組合士でもある。

「協業組合は組合員の事業を統合運営しています。したがって、責任も重く、よりレベルの高い組合運営をするためには、組合制度、運営、会計に幅広い知識が必要になります。組合士はまさにうつつつけのアイテムだと確信した」ことが資格取得の動機だそうである。

また、「運営している業務が右肩下がりとなり、組合として新たな業務を展開しなければならなくなった時にこそ、組合士であるとの自覚が強まる」と言う。なぜなら、「組合が壁にぶつかった時は運営能力を問われている時であり、組合士としては力の発揮どころであると同時に、力を試されるところだと意識する」からだと言う。

今、アクアテック栗原には佐藤さん始め4名の組合士がいるが、さらに経営や経理に携わる職員には取得への挑戦を勧められているそう。

「当組合は技術集団でもあるので、業務遂行上に必要な技術系の資格は目に付きます。けれども、事務的な資格は数も少なく、評価もされにくい面もある。そんな中で、組合士の資格は事務系職員が



アクアテック栗原の組合士さんが勢揃い（前列向って左が佐藤さん）

地元の若者が夢を持って就職できる組合を目指し

栗原市は人口8万弱。大工場など大口雇用が期待できる製造業もそれほど多くはない。そのような地元の雇用・就労環境を捉えながら佐藤さんは、「51名の職員の平均年齢は34歳で、若い人が多い。だから、今後20年、30年と安定して、活き活きと働けるような組合にしていきたい。そして、そういうアクアテックを見て、地元の若者が就職したいと思うような組合になりたい。そのために、今後も水を中心にしながら、関連する分野での事業・業務の可能性を広げていきたいと考えています。それには、これからも組合士として皆で常に資質の向上に努めていきたい」。

佐藤さんの組合の将来展望であり、組合士としての抱負である。